

(牧師室より)

[ 遊女・美幾 ]

先般ある方から渡辺淳一著『白き旅立ち』を借りて読みました。これは日本で始めて志願して解剖を申出た遊女・美幾の物語なんですね。渡辺は美幾が葬られている文京区白山にある念速寺を訪ねることから話しを起こしています。彼の執筆の動機はなぜ一介の遊女が解剖を志願するに至ったのか、その経緯をたどることにあります。事実に基づき作家としての想像力を働かせながら展開をしていきます。それによれば……美幾は嘉永4年、1851年駒込の生れ。16歳の時に新吉原に60両で売られ年季明けの27歳まで勤めることになる。「自分はこの星の下にうまれた」と覚えて。その後美幾は結核にかかり小石川養生所に入所。ここで医師の長安に思いを募らすことになる。そして「長安の記憶に残してもらえらば、最後の命の燃やし方、生きた証し」ということで腑分け（解剖）を願ひ出る。「お役に立ちたいのです」と。こうして美幾は明治2年34歳で死亡し、下谷和泉町の医学校（のちの東大医学部）で解剖される。作者は「美幾の志願の直接の動機は長安への好意から」とし「美幾は美幾なりの意志を貫いた。きれいな死への旅立ち」だったとします。渡辺は札幌医大出身ですので解剖について詳細な情報を提供しています。遊女がなぜ医学の進歩に役立つ解剖に志願したのか。これは確かにナゾですが渡辺の推理した通りであるとすれば、彼女は地の塩としての役割を果たしたことになり今は天国にあって主イエスからほめられ深い安らぎの内にあるのではないのでしょうか。